令和７年度
学校評価中間報告

１　達成目標及び検証

　教職員アンケート・生徒アンケート・保護者アンケートの各項目で、肯定的な回答（１＋２）の合計８５％以上を目指す

２　回答の選択項目

	教職員	保護者	生徒
1	よく当てはまる	よく当てはまる	当てはまる
2	どちらかといえば、当てはまる	どちらかといえば、当てはまる	どちらかといえば、当てはまる
3	どちらかといえば、当てはまらない	どちらかといえば、当てはまらない	どちらかといえば、当てはまらない
4	ほとんど当てはまらない	ほとんど当てはまらない	当てはまらない

３　評価基準

　肯定的な回答（1+2）の割合による評価の基準

　Ａ：８５％以上～１００％　　（継続）
　Ｂ：７０％以上～　８５％未満（継続・改善）
　Ｃ：５０％以上～　７０％未満（要改善）
　Ｄ：５０％未満　　（至急対策検討）

令和７年度　能登町立能都中学校　学校評価目標

能登町立能都中学校 学校経営方針　　キーワード　「命」「学び」「目標」

学習指導要領	教育目標	能登町教育理念
豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができる資質・能力の育成	**より良い人間関係を築き，創造性豊かにたくましく前に進もうとする生徒の育成**	「能登」の地と人に学び 未来を拓くたくましい力を はぐくみ一歩前へ進む人づくり

めざす生徒	**◇授業での学習や家庭学習に積極的に取り組む生徒≪知≫** **◇相手を思う優しさを持ち、協働できる生徒≪徳≫** **◇健康の保持や安全のために自ら行動できる生徒≪体≫**
めざす学校	**◇一人ひとりが笑顔で生き生きとしている学校** **◇生徒が大切にされ安心感のある学校** **◇保護者・地域から信頼される学校**
めざす教師	**◇コミュニケーションを活発にし、協働・助け合いができる教師** **◇生徒一人ひとりを大切にし、関わり合う教師**

学校経営ビジョン	**判定指標**
（１）生徒指導の充実	
①自他共に尊重できる態度の育成 ・生徒の変化を敏感に把握し、いじめ等を見逃さない。 ②道徳教育の育成 ・道徳の時間を年間指導計画に沿って適切に実施する。 ・ボランティア活動や清掃活動の実施。	(教職員アンケート) ① ② ③ ④ ⑳ ㉑ (生徒アンケート) B1 B2 B3 B4 (保護者アンケート) ① ③ ⑤
（２）確かな学力の育成	
①基礎的基本的の定着 ・学ぶ楽しさを体得できる学習活動の工夫 ・学校研究の推進 ②学習習慣の定着 ・曜日ごとに教科の課題を決めて宿題を出す。 ③ＩＣＴを活用した授業改善 ・計画的な校内GIGA研修の実施 ・授業での効果的な活用方法を共有する。	(教職員アンケート) ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑰ ⑱ ⑲ (生徒アンケート) A1 A2 A3 A4 A5 A6 A7 B7 B9 (保護者アンケート) ⑥ ⑩ ⑭ ⑮
（３）健康安全教育の推進	
①安全教育の継続・発展 ・安全・安心な教育環境の構築のため、現状に即した訓練実施やマニュアルの見直しを行う。 ②望ましい生活習慣の確立 ・規則正しい生活習慣の重要性を生徒に周知し、実践につなげる。 ・情報モラル教育を定期的に行い、主体的に利用時間をコントロールできるようにする。	(教職員アンケート) ⑤ ⑥ ⑦ (生徒アンケート) B6 B9 (保護者アンケート) ② ⑧ ⑨ ⑮

（４）信頼される学校づくり	
①保護者との密な連絡 ・生徒の学習状況や生活面について直接話し合う場を設定し、より適切な指導に繋げる。 ・保護者への情報提供や連絡を円滑に行う。 ②積極的な情報発信 ・学校公開や日々の教育活動について１回以上、学校ＨＰを更新する。 ・学校評価は焦点化した項目に絞り、改善の方向や方策を提示し公開する。	（教職員アンケート） ㉒ ㉓ ㉕ （生徒アンケート） B5 （保護者アンケート） ④ ⑪ ⑫ ⑬

（５）ふるさと教育の推進	
①地域を活かした教育活動 ・体験活動や総合的な学習の時間を活用して、教科等横断的な学びを推進する。 ②地域行事に参加し、ふるさとに誇りをもたせる。 ・郷土愛の醸成を図る。	（教職員アンケート） ⑯㉔ （生徒アンケート） B10 B11

令和７年度　能登町立能都中学校　学校評価【中間】

（１）生徒指導の充実	具体的な取り組み
①自他共に尊重できる態度の育成 ・生徒の変化を敏感に把握し、いじめ等を見逃さない。 ②道徳教育の育成 ・道徳の時間を年間指導計画に沿って適切に実施する。 ・ボランティア活動や清掃活動の実施。	積極的な声かけ・個々の生徒の様子を把握・いいとこみつけの活用・言葉遣いに注意を払い言語環境を整える（教師・生徒） 業務効率化の推進 →ワークライフバランスの向上、子どもと向き合う時間の確保

		質　問　内　容	判定		Ｒ６最終	
教職員	①	学校教育目標を達成するための教育活動を実践している。	A	100.0%	A	100.0%
	②	学校生活において生徒に目標を持たせ、その目標を達成するための具体的な働きかけを行っている。	A	100.0%	A	100.0%
	③	生徒の様子の小さな変化にも気付くように意識している。	A	100.0%	A	100.0%
	④	各種アンケートをもとに、人間関係づくりに取り組んでいる。	A	100.0%	A	91.6%
	⑳	学校生活の中で言葉遣いに注意を払い、適切な言語環境を整えている。	A	92.3%	A	100.0%
	㉑	日々の業務の効率化を意識し、遅くとも午後８時には退校している。	C	69.2%	A	92.3%
生徒	B1	自分にはよいところがあると思う。	B	78.9%	B	79.8%
	B2	先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思う。	B	84.4%	B	86.5%
	B3	学校へ行くのは楽しいと思う。	B	76.1%	B	79.7%
	B4	いじめはどんな理由があってもいけないと思う。	A	91.7%	A	94.3%
保護者	①	お子さんは、学校へ行くのが楽しそうだ。	B	81.9%	A	87.2%
	③	学校は、いじめや問題行動の未然防止・早期発見に努めている。	C	67.5%	A	89.3%
	⑤	教職員は、生徒の気持ちや内面を理解しようとしている。	B	74.7%	B	82.9%
判定基準		A（肯定回答 85%以上）、B（70%以上）、C（50%以上）、D（50%未満）				

【考察・改善】

○生徒指導における対応については、生徒の話をじっくり聴くようにしている。生徒の小さな変化を見逃さないようにアンテナを高くして、気になることは教職員で共有し、対応を共通理解するようにしている。

○「学校が楽しい」という生徒が昨年度より減少している。全ての生徒が楽しいと感じられるように、毎日の教育活動や学校行事等の機会を生かして、居場所づくりや絆づくりの取組をさらに進める必要がある。また、２学期からは縦割りによる人間関係作りなどを行い、人と関わる力を育成していく。

△業務の効率化、退校時刻への意識はあるが、時間外勤務時間が昨年度より多くなっている。生徒指導や保護者対応の時間の増加や特別支援学級における個別のニーズに対応した授業により、教員一人当たりの授業時数も増加している。そのため、業務や授業準備にかかる時間が昨年度より増加したためだと考えられる。しかしながら、生徒や保護者対応、個に応じたきめ細かな指導については充実している。今後も、生徒指導対応、保護者対応は複数体制で対応し、２０時までに退校するように取り組んでいく。

△生徒一人一人が活躍する場を確保できるように、日々の学校生活、授業や行事などで意識的に取り組

んでいる。しかし、「自分にはよいところがあると思う」という問いに対する肯定的な回答は増えていない。教師が個々の生徒への理解を深め、一人一人に応じた認める声かけを多くするだけでなく、生徒同士が認め合う場を充実させることで、自己肯定感を高めるようにしていく必要がある。また、人権感覚を高くして言語環境を整えていくことで、適切な言葉遣いへの生徒の意識を高めていかなければならない。

△定期的なアンケートや本人・保護者からの話などから、いじめの積極的認知を行っている。学校として、関係生徒・保護者との面談・連絡を取り合い現状の共通理解に努め対応している。普段の学校生活全体を通して、生徒たちの人権意識を高め言語環境を整える取組を進める必要がある。

（参考　いじめ認知件数　１０→１２件　　不登校生徒数　４→８人）

MEMO

（２）確かな学力の育成	具体的な取り組み
①基礎的基本的の定着 ・学ぶ楽しさを体得できる学習活動の工夫 ・学校研究の推進 ②学習習慣の定着 ・曜日ごとに教科の課題を決めて宿題を出す。 ③ＩＣＴを活用した授業改善 ・計画的な校内 GIGA 研修の実施 ・授業での効果的な活用方法を共有	・興味・関心に基づいて学習内容や方法を生徒が選択する ・生徒の様子、変容を視点とした研究授業の実施 ・グループワークやペア学習を通して、生徒同士が協力して学ぶ機会を増やす ・生徒一人一台端末を積極的に活用 ・積極的な授業実践と研修に取り組み、効果的な活用方法を模索する。

		質　問　内　容	判定		Ｒ６ 最終	
教職員	⑧	各種学力調査の分析を生かし、学習指導の工夫・改善に努めている。	B	81.8%	A	100.0%
	⑨	授業で、インプットさせる内容を明確にしている。	A	100.0%	－	－
	⑩	授業で、インプットさせるための手立てを工夫している。	A	100.0%	－	－
	⑪	生徒が授業でインプットすべき内容を見につけている。	B	75.0%	－	－
	⑫	生徒が授業で「求める内容」をアウトプットできている。	A	91.7%	－	－
	⑬	主体的・対話的で深い学びが実現されている。	C	58.3%	B	75.0%
	⑭	自然や日常生活、社会との関りを意識した学習内容も取り入れている。	A	100.0%	A	100.0%
	⑮	指導者としての意図をもって、授業で一人一台端末を活用している。	A	91.7%	A	91.7%
	⑯	体験活動や総合的な学習の時間を活用して、教科等横断的な学びとなるようにしている。	A	90.9%	B	83.3%
	⑰	授業の約束４か条を意識し、指導している。	A	100.0%	A	100.0%
	⑱	校内研修は指導法の工夫・改善に役立っている。	A	91.7%	A	100.0%
	⑲	生徒の家庭学習の状況を把握し、学習時間が増えるように繰り返し指導している。	B	83.3%	A	91.7%
生徒	A1	授業では、課題に対して、自分で考え、自分から取り組んでいると思う。	B	84.4%	A	88.7%
	A2	授業では、ペアや全体に対して伝えたり、発表したりする場面がある。	B	74.3%	A	73.0%
	A3	授業では、生徒の間で話し合う活動をよく行っていると思う。	A	89.0%	A	93.2%
	A4	友達と話し合うとき、友達の話や意見を最後まで聴くことができていると思う。	A	91.7%	A	98.8%
	A5	授業では、自分の考えを他の人に伝えたり、書いたりすることができていると思う。	A	80.7%	A	83.1%
	A6	生徒の間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思う。	B	80.7%	B	82.0%
	A7	学習の中でコンピュータなどの ICT 機器を使うのは勉強の役に立つと思う。	A	92.7%	A	97.7%
保護者	⑥	授業はわかりやすいと言っている。	C	54.1%	B	80.8%
	⑩	家庭では、テスト１０日前から、９時以降、３ノー（ノーテレビ、ノーゲーム、ノーＳＮＳ）に取り組んでいる。	D	33.7%	D	21.2%
判定基準		Ａ（肯定回答 85%以上）、Ｂ（70%以上）、Ｃ（50%以上）、Ｄ（50%未満）				

家庭学習　　（ ）内%は、Ｒ６最終

家庭学習		30 分以内	30分~1時間	1~2 時間	2 時間以上
生徒 B7	平日に１日あたりどれくらいの時間勉強をしますか。	**24.8%** (24.7%)	**43.1%** (41.6%)	**25.7%** (25.8%)	**6.4%** (7.9%)
保護者 ⑭	お子さんは、平日に１日あたりどれくらいの時間家庭学習をしていますか。	**20.5%** (21.3%)	**48.2%** (42.5%)	**30.1%** (30.1%)	**1.2%** (4.1%)

【考察・改善】

〇昨年度に引き続き、授業での生徒のアウトプットに重点を置き共通実践している。指導者がアウトプットの意図を明確にもち、授業のねらい達成につながる思考を伴ったアウトプットを目指して授業改善に取り組んでいる。

〇授業前に「インプット」の内容や手段を明確にして臨むことが定着してきた。しかし、その内容を生徒と共有できていなかったことから、教員と生徒が授業で大切にしたいことを共有するため「学習集会」を行った。授業では「相手に伝わるように自分の考えを適切に表現できる」ようになるため、「アウトプット」と「インプット」を重視していくことを共通理解した。また、生徒の声や思考から授業がスタートするように教科書の音読やふり返りの交流、過去の課題に取り組むなどの時間を設定することとした。その活動と「インプット」「アウトプット」の内容がスムーズに流れるような授業展開にするべく、流れを組み立てて授業に臨む教員の姿が増してきた。

△「授業はわかりやすいと言っている。」（保護者アンケート）で大幅に肯定的な回答が減少している。アウトプットに重点を置いた取組によって、必要な知識・技能の定着、活動のための方法や指示が伝えられていないことが原因と考えられる。そのため、インプットする内容を絞り、それを用いた学習活動を展開する必要があると改善に向けて進めている。その他、教員の学びに対する表面的な理解にとどまり、具体的な授業のイメージが持てていないことが原因に挙げられる。生徒同士の話合いをさせても、それが深い学びに繋げるための「対話」になっているのか、どんな発問をすることで生徒の主体性を引き出すことができるのか、授業のゴールをどこに設定し、そのためにどのような学習活動を設定すればよういのか。このような理解不足を解消するために、研修の充実や、他の教員の実践例を共有する機会を増やすなど、継続的なサポートが不可欠となる。

△学力調査の結果から本校の平均点は県の平均点に届いていない。授業での共通実践が「学ぶことの楽しさを体得できる授業」「生徒が分かる授業」「主体的・対話的で深い学びの実現」となるようにし、生徒の資質・能力の育成につなげていかなくてはならない。

「学習集会」【授業スタイルの共有・安心安全なクラスづくり】

授業スタイルの共有

インプットとアウトプット体験

アドじゃん！

「校内授業研究」

（３）健康安全教育の推進	具体的な取り組み
①安全教育の継続・発展 ・安全・安心な教育環境の構築のため、現状に即した訓練実施やマニュアルの見直しを行う。 ②望ましい生活習慣の確立 ・規則正しい生活習慣の重要性を生徒に周知し、実践につなげる。 ・情報モラル教育を定期的に行い、主体的に利用時間をコントロールできるようにする。	・教職員の危機管理意識を磨く。 ・実効性のある仕組みへと常に見直す。 ・現状に即した訓練実施 ・食育 ・給食指導 ・情報メディア教育

		質　問　内　容	判定		Ｒ６　最終	
教職員	⑤	危機管理意識をもって教育活動を行っている。	A	92.3%	A	100.0 %
	⑥	生徒自らが危険を察知・回避する力を育成している。	A	92.3%	A	83.3%
	⑦	生徒は、学校生活を通して元気にあいさつや返事をしている。	B	76.9%	B	76.9%
生徒	B6	携帯電話・スマートホンやコンピューターの使い方について、家の人と約束したことを守っていますか。	B	75.2%	C	69.6%
保護者	②	学校は生徒の安全を守るために努力している。	A	86.7%	A	91.1%
	⑧	お子さんは、毎日決まった時間に起床・就寝している。	B	84.3%	－	－
	⑨	お子さんは、携帯電話・スマートフォンやコンピューターの使い方について家の人と約束したことを守っている。	C	59.0%	D	46.8%
判定基準		A（肯定回答 85%以上）、B（70%以上）、C（50%以上）、D（50%未満）				

テレビ、ゲーム、インターネット　　（ ）内%は、Ｒ６最終

テレビ、ゲーム、インターネット（ＳＮＳ、動画視聴等）		1時間以内	1～2時間	2～4時間	4時間以上
生徒 B9	平日に１日あたりどれくらいの時間、テレビやゲーム、インターネットをしますか。	4.6% (20.2%)	29.4% (15.7%)	46.8% (40.5%)	19.3% (23.6%)
保護者 ⑮	お子さんは、平日に１日あたりどれくらいの時間、テレビやゲーム、インターネットをしますか。	9.6% (10.7%)	31.3% (29.8%)	49.4% (53.2%)	9.6% (6.4%)

【考察・改善】

○９月８日に震度３の地震が起こった。朝の朝礼時間帯で担任や級外が各クラスにいたこともあり、どの学年もすばやく机の下に入り身を守る行動が瞬時に取れていたとの報告を受けた。また、職員室にいた職員もすばやく校内や各教室の生徒の安全確認をすることができた。

△本年度は５月に、火災想定の避難訓練、６月に不審者想定の避難訓練を実施した。訓練では少し真剣味が感じられない場面も見られた。今後とも、あらゆる場面を想定した訓練を行うと共に、生徒一人一人が自分事として危険を捉え、どう行動すべきかを考え教職員の指示がなくても安全に避難できる力を高めていく必要がある。また、今年度は防災用折りたたみヘルメットを生徒の机の横に配置している。避難や身を守る行動をとる際に適切に使用できるように指導していく。

（地震・火災による避難訓練の様子）

（不審者対応避難訓練の様子）

▲平日の利用時間が４時間を超える生徒は昨年度より減少したが、２時間以上の生徒が増加している。また、1 時間以内だった生徒が減少し、1 時間以上の生徒が増加している。平日の使用時間は、全体的に増加している。それらの使い方について家の人と約束したことについては、昨年度よりも改善傾向にあるが、生徒自らが使用目的や使用時間を考え判断し行動する力、自己指導能力を育成していかなければならない。

MEMO

（４）信頼される学校づくり	具体的な取り組み
①保護者との密な連絡 ・生徒の学習状況や生活面について直接話し合う場を設定し、より適切な指導に繋げる。 ・保護者への情報提供や連絡を円滑に行う。 ②積極的な情報発信 ・学校公開や日々の教育活動について１回以上、学校ＨＰを更新する。 ・学校評価は焦点化した項目に絞り、改善の方向や方策を提示し公開する。	・個別面談や三者面談の実施 ・電話連絡や家庭訪問 ・tetoru での連絡配信 ・HP 担当を各学年に配置し、それぞれの学年の活動を配信する。 ・学校評価者委員会の開催 ・結果を HP や学校便りに掲載

		質　問　内　容	判定		R6 最終	
教職員	㉒	日常的に共通理解やコミュニケーションを図るようにしている。	B	84.6%	A	100.0%
	㉓	報告・協議事項は、全員に周知されている。	B	77.0%	A	100.0%
	㉕	保護者・地域へ、積極的に情報発信を行っている。	B	84.6%	A	92.3%
生徒	B5	家の人と学校の出来事や将来のことについて話をする。	C	67.0%	B	71.9%
保護者	④	学校は、何事に対しても誠実に対応している。	A	85.5%	A	93.6%
	⑪	家庭では、学校の話などの会話をよくしている。	B	79.5%	B	70.2%
	⑫	教職員は、保護者との連携を密にしている。	B	75.9%	B	80.9%
	⑬	学校からの各種便りの発行やホームページの更新などは十分である。	B	80.7%	B	83.0%
判定基準		A（肯定回答 85%以上）、B（70%以上）、C（50%以上）、D（50%未満）				

【考察・改善】

△生徒の気になる様子について保護者との連絡を密に行い、連携を図るようにしている。事実を伝えるとともに、学校としての指導・支援の方針を保護者に分かりやすく説明し協力を求めていく姿勢を大切にしていきたい。また、地域社会の一員として信頼される学校となるように、学校便り・ホームページを通して、日々の教育活動が伝わるような情報発信にさらに努めていく必要がある。

▲生徒アンケートでは、学校での出来事や将来について家庭で話す機会が 67.0%であり、昨年度より減少している。2 学期は体育祭や文化祭など生徒にとって最も記憶に残り、盛り上がる行事がある。そういった行事の特性を生かして、家庭で語りたくなる生徒の気持ちを引き出していく。また、保護者の方にとっても、学校行事等で生徒たちの活躍を見ていただく機会が増えるので、学校だよりやＨＰを通して積極的に発信し、来校していただくとともに、家庭での共通の話題のきっかけとなるようにしていく。

また、キャリアパスポートについても、学期に１度は家庭に持ち帰ることで学校での成長を保護者、生徒ともに感じられるようにしていく必要がある。

（５）ふるさと教育の推進	具体的な取り組み
①地域を活かした教育活動 ・体験活動や総合的な学習の時間を活用して、教科等横断的な学びを推進する。 ②地域行事に参加し、ふるさとに誇りをもたせる。 ・郷土愛の醸成を図る。	・地域の資源を生かした、海洋教育に取り組む。 ・地域人材や施設を活用する。 ・地域の祭りやイベントへの参加を積極的に促す。 ・地域の伝統を学ぶ体験を行う。

		質　問　内　容	判定		Ｒ６　最終	
教師	㉔	地域の人材・教材を取り入れた授業を年２回以上実施（予定）している。	C	61.5%	B	84.6%
生徒	B10	地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がある。	B	70.6%	C	69.7%
	B11	地域やふるさとについての学習に積極的に取り組んでいると思う。	B	70.6%	－	－
判定基準		A（肯定回答 85%以上）、B（70%以上）、C（50%以上）、D（50%未満）				

○3 年生においては、伴旗作成の手伝いや七尾高校マリンサイエンスへの参加など、海洋教育や伝統文化体験、地域行事への参加を通じた活動を実施した。これらの取り組みは、生徒がふるさとの魅力を実感する貴重な機会となった。

○夏季休業期間中、地域の事業所の協力を得て、町内外の計 20 か所において職場体験を実施することができた。生徒は各職場において実際の業務に携わり、働くことの意義や責任を体感するとともに、社会人としての基本的なマナーや対人スキルを習得する貴重な機会となった。地域の人々との交流を通じて、生徒は自らの暮らす町の魅力や課題を再認識し、地元で働く人々の姿から、ふるさとへの誇りと愛着を深めることができた。

△教師アンケートでは、「地域の人材・教材を取り入れた授業を年 2 回以上実施（予定）している」と回答した割合が 61.5%であり、昨年度の 84.6%から大きく減少している。この要因としては、1 学期における 3 年生以外の学年での活動が少なかったことが考えられる。

2 学期に入り、1 年生は校外学習として「のと海洋ふれあいセンター」にて磯観察やシュノーケリングを実施した。磯観察では海藻などの生物に触れ、能登の海の豊かさを体感することで、海に対する親しみを深めることができた。

今後は、校外学習や金沢研修、職業人講話などを通じて、地域人材や施設の活用をさらに推進する予定である。

△活動が単発的になりがちであり、年間を通じた計画的・継続的なふるさと教育の構築が十分とは言えない。特に若手教員にとっては、地域資源の活用に対する知識や経験が不足している場合もあり、校内における支援体制の充実が求められる。

また、生徒アンケートでは約 30%が地域への関心や学習への積極性を示していないことから、すべての生徒がふるさと教育に前向きに取り組めるよう、個々の興味・関心に寄り添った活動の工夫や、成功体験を積ませるための仕掛けが必要である。